内 容 紹 介

プログラム名		講師・話し手	お話の概要
11月13日 13時	シンポジウム「孤」を防ぎ「個」を支える妊娠期からの母子と家族への継続ケア	井上千秋氏（いのうえ助産院 院長）	保健指導のみの助産院を開設し、姫路市、福崎町、市川町の産後ケア事業の訪問型を行っています。もっと早く訪問をしてほしかったと多くの女性の声を聴きます。福崎町では保健センター内で多職種と連携して妊娠期から子育て期の継続ケア、教育委員会と連携して性教育授業や個別相談、教員対象の性教育講座なども行っています。自らの出産で出会った 3 人の開業助産師からの学びが現在行っている「めぐる助産師活動」の原点であることに触れたいと思います。
		堂東美穂氏（丹波篠山市役所 保健福祉部健康課 課長 保健師）	兵庫県丹波篠山市では、令和２年８月から市内の全妊婦を対象とした、My 助産師（担当助産師）による産前産後の継続ケアを始めました。全国的な分娩施設の集約化の流れの中で、当市も出産できる医療機関が１か所となりました。女性が安心して子どもを産み育てられるように、母子健康手帳交付時から産後の赤ちゃん訪問まで、地域で母子に寄り添う支援を始めるに至った経緯をご紹介します。
		成瀬郁氏（丹波篠山市役所 保健福祉部健康課 助産師）	丹波篠山市の「My 助産師による産前産後の継続ケア」が本格的にスタートし 1 年が経ちました。継続ケアを実践することで、母子とその家族に必要なものがみえてきます。妊娠期からつながりができていることで、産後の母子の孤立も防げます。地域で妊娠期から産後まで、女性が母となる過程に同じ助産師が寄り添う支援の実際とメリット、ケアを受けた女性の声などをご紹介します。
		横山恵子氏（ふたご育児中の母親）	明石市在住のふたごのママです。初産で高齢なうえ、コロナ禍での妊娠・出産・育児は、孤独と不安との戦いでした。そんな中で、1歳半まで育てて来られたのは、孤独と不安の沼から救い出してくださった方々のおかげです。SOS に気づいてくださり、優しく手を差し伸べてくださったことに、感謝の気持ちでいっぱいです。そんな私の経験をお話しします。今まさに闘っている、そしてこれから闘う多胎児ママを救うきっかけに、少しでもなれば幸いです。
11月13日 15時	リレートーク子と個を支える府県助産師会の取り組み	大阪府：田中陽子氏（産前産後ケアセンターセンター長）	日本で３箇所しかない助産師会運営の産前産後ケアセンターです。近隣の８市からの委託を受け稼働率 53%、単発の乳房ケアから、ショートステイ、ながいかたでは 1 ヶ月間過ごされる方もいらっしゃるというセンターの概要と現状、助産師会運営ならではの強み（特長や特色）、今後の課題もまじえてご紹介いただきます。
		奈良県：西川佐稲子氏（心友助産院 院長）	心友助産院での産後ケアの実際の現場を撮影。現在の心友助産院と市町村との契約状況や、利用者数を紹介するとともに、保健師をはじめとする地域の他職種の連携とのつながりを大切にしながら、性教育などの地助産師活動を積み重ねることで、つながりが次のつながりへと広がり、現在に至った経緯など。心友助産院の軌跡、こだわりや魅力を助産師に伝えたい。
		京都府：藤原朋子氏（ふじわら助産院 院長）	京都府助産師会会員の関わる産後ケア事業について、舞鶴市の助産院の地域に根差したケアの実際。また、様々な課題に直面しながら行政と当会で計画を進めている、宿泊施設を利用する日帰り型産後ケア施設調整事業について、すでに実施している宇治市の例をご紹介させていただきます。
		滋賀県：堀尾満代氏（うたな助産所 所長）	これまで数例（自費）あり、その際、「産後ケア」の事例にはならなかった経験をした。その後、産後ケアの事例はほとんどない。近江八幡市として制度はあるが、実際の利用者がない。敷地内同居が多いこと、自費負担がネックになっている。保健師と助産師の認識にズレがあることも課題。ちょっとした不安を持つお母さん達にも目を向け、関わっていきたいので、仲間の助産師と共に、保健師と話し合い、まず訪問型の産後ケアを実現させたいと動いている。
		和歌山県：中西理予氏（バース・ハウス なかにし助産院 院長） ※話し手が変更になりました	和歌山県からは、海岸沿いの中央部に位置する御坊市という小さな町の小さな助産院、『バース・ハウス なかにし助産院』での取り組みをご報告いたします。長い間『助産院』がなかった地域で出張専門助産所として開業し、施設を建てて7年目となります。仕事がほとんど無い状態から、育児サークルや性教育の活動を経て、現在は施設・出張での分娩や、周辺の二市五町から産後ケア事業の業務委託を受けています。今回の発表では、バース・ハウスなかにし助産院の施設と、妊娠期から産後ケアを通じて大切にしている傾聴の方法も含めてご報告いたします。
		兵庫県：毛利多恵子氏（毛利助産所 所長）	兵庫県からは毛利助産所での取り組みの紹介をしていただきます。分娩取り扱い施設でもあり、産後ケアでも県内の先頭を走って、宿泊・日帰りでの産後ケアに取り組んでいらっしゃいます。これまで培ったノウハウや、実際に母子が過ごすお部屋、ネットの口コミでも評判の食事、ケアに於いて大切にしていることなど、時間の限りお伝えいただきます。
11月14日 10時	講演「感染症流行下での災害で母子を孤立させない取り組み」	菅原準一氏（東北大学大学院医学系研究科母児医科学分野 教授）	「災害後の中長期的な母子保健対策マニュアル」を基に、発災から中長期的にわたる妊婦や母子のおかれる状況、災害対策組織と協働して支援活動を行うための助産師の役割についてお話しいただきます。
		吉村圭子氏（熊本市保健所 医療政策課 助産師）	被災時の母子への支援活動と母子を孤立させない取り組みをお話しいただきます。 菅原先生・吉村先生の講演後、小グループに分かれて、感染症流行下での災害における母子支援につい自分の職場や地域で取り入れられそうなことを話し合いましょう。
11月14日 13時	講演「助産師だからできる妊娠期からの継続ケア」	柳村直子氏（日本赤十字社医療センター周産期外来看護師長）	コロナ禍での助産ケア 2020 年 2 月より新型コロナウイルス感染症のパンデミックは続いています。総合周産期センターとして、COVID-19 陽性妊婦や疑いのある妊婦の受け入れをしており、助産師がそのケア行っています。コロナ禍以前と同じことが出来ない中、医師や他職種と協働し、感染対策を徹底して安心・安全な場をつくる、母子を孤独にさせないをモットーに助産ケアを行ってきました。その助産ケアについて、特に分娩の立ち会いやマタニティクラスなどについて紹介します。